



(號七十九百二第)

日經上人三百遠忌に會して... 信仰心徳力の發揚... 松尾鼓城氏に寄せてネオモニズムの見地より勞働問題を論ずる書... 日蓮主義者の奮起せる勞資問題解決運動

記者 機微譚語 九六精華の講書九七富... 山根青村 松尾鼓城 伊藤延次

(一) 峻しき坂路深き谷 休らふ宿もなく鳥の 同し音色に光なく

妹尾義郎 作 日は暮れ果て、道遠し 淋しき聲も山彦も 夜嵐のみぞ身には沁む

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發 番三三五三三京東座口替振

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可 大正八年十月十五日發行(毎月一週一十五日發行)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可 大正八年十月十五日發行(毎月一週一十五日發行)

統一事務取扱

東京市小石川區白山前町

統一編輯所

念珠ならは小野嘉助店へ 日蓮宗各本山御用達 御念珠各種 京都寺町通繪師下ル 念珠小野嘉助 電話中二六〇八番 振替口座大坂一九七二〇番

日蓮各宗 寺院 御僧 法衣 草木 京都 三條通鳥丸東入ル町 草木本店 電話中七三五番 振替口座東一一五五九番

佛壇、佛具一切卸小賣 卸部 三法堂 藤田總治 各宗御木山御用道 長距離電話中二七三番 振替口座大坂四二五九番

布 眼の藥 効能、たゞれ目、かすみ 目、ぼし目、くもり目、ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等 定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五十錢、七拾錢、壹圓

佛像佛具 調度所 位牌木鉦 宮殿幢天蓋一式 普通品定價郵券貳錢封入送呈 總本山妙滿寺 大本山本國寺 日宗各教團 御用達

生徒募集 千葉縣千葉郡千葉町院內 (千葉神社裏通) 憲兵屯所向横丁 私立山口刺繡學校 校長 山口京太郎 規則書入用の方は御通知次第校則を 進呈いたします

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊) 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎(▲印刷人鈴木日雄(十三錢郵稅五厘))

◎見本

●大正新年賀交換
 九年新年賀交換に付て
 本年は僧俗同信者共に統一誌上
 に年賀廣告を掲げて互禮の賀を
 交換致したいと存じます。
 就きましては五號活字十四字詰
 四行を一區として一區五拾錢に
 致します。

恭賀新年

山梨縣何々郡吉田村
 妙法寺住職

獅子吼王

小石川白山前町一七

統一編輯所

何野 吳 誰

日本橋

山本川造

▲申込べ切十二月五日迄

▲廣告料は十二月中に集金郵便で御願ひ
 致します。集金手数料は別に五錢の事
 ▲発行は一月早々發行す

●一月十二月合併號に就て

十一月號は十二月號の名で、又十二月號
 は一月號に合併します但し一月號は月頭
 發行の事(但し此號廿六錢郵税一錢)

おことはり

活版部の方で職場が例の流行のゴテ
 として居ました爲め、一時職場は
 休業でしたから、本月は印刷おくれ
 相済み不申候。

臺灣支部設立廣告

今回臺灣臺中松鶴妙明氏の
 宅へ支部設置仕候此段廣告
 候也

▲又、畫を描きます

支部の設置に就て
 先般來は自慶會の事や、力産會の設立で
 多忙でしたが、目鼻がついて少し手あき
 になりましたから、之から又好きな畫を
 描きます。又統一團の支部設立に就て盡
 力します。

松尾鼓城

□編輯局から

▲雜報投稿者へ御依頼

雜報投書下さる方の中に、あまり達筆や
 早書の爲にサツパリ讀めぬ者があり、特
 に地名人名の如きは其ちらで御得心ても
 當方では通ぜず間違ひながら掲げるもの
 も澤山あります。雜報はドウカ二十四字
 詰で正格な文字で、簡單に要領に、もし
 て趣味のあるやう、むづかしい注文なが
 ら御依頼申しあげます。

▲和歌俳句の投稿者へ御依頼

和歌俳句は一枚の同紙の一つに書かぬ事
 和歌は原稿を其儘送る者の方へ廻すのです
 から其御心持で、又一枚の紙へ二人三人
 が一つに書かれることもお断り申します

天下 松鶴目藥

無比 松鶴目藥
 主治
 ○トラホーム
 ○流行目
 ○起珠
 ○血目
 ○爛目
 ○熱目
 ○打目
 ○其外
 ○火傷
 ○凍傷
 ○蟲毒
 ○切傷
 ○腫物
 ○一切

定價貳拾錢

小石川區春日町十六番地

取次所

芹

田

日經上人三百遠忌に會して

讀者諸君

本年當月は不借身命の行者常樂院日經上人の三百遠忌に相當致候

世は徳川の天下と化し、宗旨保護の美名の下に溫和的束縛を實施して僧に法争を禁じ俗に

改宗を止めしめ、一方に威壓の權力、一方に馴撫の魔手をのばしたる幕府の宗教政策は、流

石に滔天の猛勢を以て各宗を破折し領域の擴張日に進み聽て皆歸妙法の曉を顯現せんとばか

りの日蓮宗風も、此の政策の魔酒に酔ふて早くも貴族的耀街の弊風に陥り迫害の難きよりも

逸樂を安しとして漸く頹勢を生じ、稜々の意氣軒昂の性風も沈澱して去勢されし人の如かり

し其時、奇なる哉日經なる一偉僧突として輩出し、強折伏を法劍として毒鼓を亂打し、法幢

を中天に耀揚して身輕法重の範を示す。是に於て法難頻々として集り、或は杖木瓦石而打擲

之、或は牢獄水火の呵責に逢ひ粗械枷鎖に身を辱かしめ、遂に子弟と共に剋削の刑に處せら

る、に至るも、法華經の爲に身命を棄るは瓦礫を以て寶珠に替ふるものなりとして、刑後も

尙死身弘法の軌に則り、布教一日も止まず寺を建ること五十、弟子五百人を教へ、信徒十萬

を率ひられたる大奮闘は聞くだに勇ましく身の毛もよだつ次第に御座候。

今大正の秋、宗風元に還つて少しく隆盛の域に對へる半面には、又や、惰氣の伴はんとす

るものあり、此時に際して經師の遠忌に會するもの決して偶然ならざるもの可有之と存候。

讀者諸君よ、我等は此機を以て諸君と共に益々我折伏的宗風の復活を叫び且つ行はんこと
 を誓ふの光榮を有し申候。(大正八年十一月初旬、松尾生)

信仰心徳力の發揚

本多 日生

人間固有の直心 即ち誠心を開くことに於て、こゝに始めて人間の眞價が現はるのである。軍人への勸諭に、心誠ならざれば、如何なる嘉言も善行も皆うはへの飾りにて何の用にかは立つべきと、御示しなされしは、國民一般の各々服膺すべき所である。而してこの心の誠は如何にして開かれ得るか云ふに、中庸には誠は天の道誠を思ふは人の道とあつてその天道を畏敬する所に、人間の心の誠が開かれるのである。御製に、目に見えぬ神の心に通ふこそ、人の心の誠なりけれ、とあり、されば宗教的心情を以て向はされば、人の心の誠は發現し難いのであり、誠が發現しなければ、その人は如何なる嘉言善行ありとも、皆うはへの飾りにて、事に當つて用をなさぬものである。これだけの事は我が國民の普く知つて居る所であらう、果してこの事を考へたならば、宗教信仰の如何に大切なるか、又現代人心の頹廢を救ふに於て、幾何の力を有するかを知るべきである。

宗教信仰の必要は 斯くして今

日では最早問題ではないが、唯だその信仰の性質に於て、若しも人をして勇ましき力を現はさしめず、却つて消極に導くとか、人智の發達を妨げ教育の効果を傷つくとか、若くは國民道徳を輕視し、國家の歴史的に養ひ來れる善良なる風習を破壊するが如きものは、その影響の悪しきが爲に、之を採用することは無論出來ない日蓮聖人が人生の徳行を無視する宗教や、國家の興立を思はざる宗教を誡めて、天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得べきかと云ひ、先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべしと云ひ、又法は國を鑑みて弘むべし、彼の國によりかりし法なればとて、この國にもよかるべしと思ふべからずと論じて、人生の徳行國家の興立と一致すべきを力説せられしは、こゝに宗教の信仰を定めんとする人々の、最先に領解し置くべき所である。

又宗教の信仰は 實際の生活を善

導して、其處に信仰の徳と力を十分に現はすものでなくてはならぬ、日蓮聖人が、御みやづかえを法華經とおぼしめせ、一切世間の生を治

むる産業は皆實相と相違背せずとはこれなりと教へ、又法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用ゆるなれ、東に金棒なるべしと説き、けなげ即ち剛健なる精神を獎勵せられ、自らその範を示して、如何なる難題の壁ひ來るとも、本より存知の旨也と喝破し、その外の大難は風前の塵なるべしと觀じて、眞に絶大なる勇氣剛健なる精神力を發揮し、而して最後に信仰の勝利を顯ふて、立渡る身のうき雲も晴れぬべし、たへの御法の鷲の山風と朗吟しつゝ、奮闘の中に喜悅に満ち、日蓮ほど喜び身にあまる者はよもあらじと言ふ、而して廣大なる慈悲を示しては、一切衆生の一切の苦を受くるは日蓮一人の苦なり鳥と蟲とは鳴けども涙おちず、日蓮は泣かねども涙ひまなしと言ふ、その慈愛の切なる心あるもの、感動を禁じ難き所である。

且つ、この廣大なる慈悲を

實現するには國家結合の力を通して、進むべきを認め、國亡び家滅びなば佛をば誰か崇むべき法をば誰か信すべきやと論じ、自らの志願を陳べては、我れ日本の柱とならん我れ日本の大船とならん、我れ日本の眼目とならんと言ひ、斯くて速大なる慈悲心と、的確なる立脚地とを押へて、日は東より出で、西を照すを理想とし、清澄山頭旭日の太平洋に登るを見て、南無妙法蓮華經と聲朗かに唱へたる如きに至つては、眞に千歳の下國民をして敬慕措かざらしむるもの

がある、若しこの事蹟とその理想とを懐ふて、而も尚ほ感懐せざるあらば、その人は斷じて眞の日本人ではあるまい。唯日蓮は確かに我等の模範人格者である、日蓮聖人はこれ等の大精神と大志願とを一言にして菩提心と稱せり、菩提心とは梵語なり、譯して無上道と云ふ自らこの無上道を求め復他をして之を得せしめんとするこの無限向上の大志願と、慈悲衆生の大慈悲とを合せて菩提心と云ふ。聖人云く、この度強盛の菩提心を發して退轉せじと願しぬと、且つ弟子檀那に教誡して云く、例には他を引くべからず今までかうて候事は日蓮は一人なれども心のつよきなるべし、心かひなければ多くの能も無用なり、我れ今より一實の經王を受持し三界の獨尊を本師として今身より佛身に至るまでこの信心を退轉する勿れ、いかに強敵かさなるともゆめゆめ退く心なれざる、心なれればひねを、は錦にて引切、詞をばひしほを以てつゝ、命の足にはほだしを打つて鐘を以てむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死にせよと、信仰心の徳と力を發揚すること眞に至り盡せりである、斯くの如き信仰を我が國民は體得すべきである。

佛陀釋迦は 曾て菩提心即ち信仰心

の徳と力を説くこと眞に巧妙なるものあり、今その少分を紹介せん

信仰心徳力の發揚

の佛法を生ず、菩提心とは猶ほ良田の如し能く衆生の白淨法を長ず、菩提心とは猶ほ大地の如し、能く一切の諸の世間を持す菩提心とは猶ほ淨水の如し、能く一切の煩悩の垢を洗ふ、菩提心とは猶ほ大風の如し、能く世間の於て所礙無し、菩提心とは猶ほ盛火の如し、能く一切の諸の薪を燒く、菩提心とは猶ほ大道の如し、菩提心とは猶ほ善提心とは猶ほ舍宅の如し、菩提心とは猶ほ安穩ならしむ、菩提心とは猶ほ慈父の如し一切の諸の菩薩を調導す、菩提心とは猶ほ慈母の如し、一切の諸の菩薩を生長す、菩提心とは猶ほ乳母の如し、一切の諸の菩薩を養育す、菩提心とは猶ほ帝王の如し、一切の諸の願中に自在を得ん、菩提心とは猶ほ海の如し、一切の功德悉く中に入る、菩提心とは猶ほ鐵圍山の如し、一切の諸の世間を攝持す、菩提心とは猶ほ調慧象の如し、其の心を善順にして猶ほ狼ならず菩提心とは猶ほ清淨の如し、能く一切の諸の濁を清む、菩提心とは猶ほ功徳瓶の如し、一切衆生の心を満足せしむ、菩提心とは猶ほ鳥衣の如し、一切生死の垢を受けず、菩提心とは猶ほ快箭の如し、能く一切の諸苦の的を破る、菩提心とは猶ほ堅甲の如し、能く一切如理の

世には人の直心 即ち誠心の大切

なるを知らざる者あり、之を知るも之を開くべし實際の方法を考へざる者あり、又誠心の開發は宗教的方法に依るの可なるを知るも、宗教の選擇に惑ふ者あり、その甚しきに至りては今尚ほ宗教信仰の徳と力を確認せざる者あり、或は切りに新を競ふて日本化せざる信仰に走る者あり、或は虛妄なる迷信に陥る者あり、これ等の人々の爲に日蓮聖人の遺訓と大聖釋尊の法語とを擧げて、その覺醒に資せんとしたのである、今尚ほ佛法を輕蔑する人よ、これ等の聖訓を拜して如何の感がある、冀くは誤れる因習より一日も早く覺醒せんことをそれが人たるの眞價を發揮し、又國家と文明とを捧ぐる用意として最先の覺悟であり、眞正の立志發願である。

不惜身命の行者日經上人

松尾 鼓城

(上)

△日蓮上人の時よりも

日經の時

日經上人の則、刑の刑難は其諸難中の最大なるものである。此御難の後、其信者の中にも心には日經上人に對してお氣の毒だと思ふ人もあつても、徳川幕府を憚つて庇護しやうとする者は無い、無いばかりならよいが、却つて不甲斐ない宗派の坊さんが日經が何處々々でまだ説法を致して居りますと訴へ出るものがあるに至つてはたゞ呆れるの外はない。

嗚呼日蓮上人のお言葉に、釋尊の御在世よりも我時は怨敵が重なりと申された、然るに日蓮上人の時信者も少なかつたけれど、法華經を持てるほどのものは日蓮上人を見捨てるやうなものはないが、日經の時日本國の法華宗一同から見放され、日本の浄土宗は一味になり、日本の國主は敵となり、それが皆日經一人に對つて来るのであるから、是れ全く法華經の如來怨敵況滅度後の經文に當つ

て居る。況滅の況の字は、釋尊の御時よりは日蓮上人の御時が勝れて居る、日蓮上人の御時よりは今の日經の時が甚い(其取意)これは日經上人が叫ばれた言葉である、其當時の迫害の狀態推察すべきである。

△尾張の布教と事の發端

この際、刑の刑難は何んなことが原因になつて起つたか、又何う云ふ經過に於て刑は執行されたか。慶長十三年の事である。諸々方々で強折伏を致された日經上人はこの夏尾張に教の戦線を開かれたのである。尾張は昔から念佛宗の盛んな土地である。彼の徒は昔から念佛宗の盛んな妨害を加へた。日經を殺せと張り紙をしたものもあつた。八月晦日に例に依つて上人は法話を致されて居らるゝ、其處へ念佛門徒は黨を組んで来て居たが、沙合をはかつて五六百人のものどもは、どつと立ちながら高念佛を唱へながら、足踏みしつ踊をおどりつゝ、大亂痴氣に雜せりかへしたので、談議は全く中止するの止を得ない仕置であつた。法理に於て日經上

人の敵でない無念時しを腕力で返すと云ふ卑劣なる心の念佛徒は、九月初日の朝から眞劍に奔走して居たやうであつたが「二日には、はや人敷四五百人備し、それがし(日經)を打ち殺さんと、ひしめくよし告げ来る」者もあつて、事態容易ではなかつた。此時日經上人は決心の旗をかためられた、それはどんな様子に決心せられたか。

△生命を捨て、の決心

是より先に浄土宗の連中は五度も狼藉をしたしかし日經上人はチツと辛捧されて居た。なげかと云ふに此已前に日經上人は幕府から職まれて居た。御所様(家康)其已前、我等宗論好みをいたし候とて、廣々御紀明成され候を、おそろしく存候で、かんにん申候が「幕府に對する遠慮があつた、左なくとも五月蠅訴人する念佛徒に對して手加減はあつたものと見えだが「此時愚僧(日經自らを指す)思案をめぐらしつる様は」即ち日經上人も餘程お考へになつた、兎にも角にも生命はあるまい、此の日經が生命のある間は折伏教化をやる、折伏教化をすれば迫害される、特に日頃の状態では晩かれ早かれ生命も奪られることは必條じや、生命がなくなるとするとウソと彼れの急所をついてをく必要がある、ヨシ幕府何かせん家康何者ぞやの決心をなされたのである「すでに只今は命を果さるゝの間、なきあとの爲に遣さんと

彼の宗(浄土宗)の狼藉を遂にして、二十三ヶ條法文を書付かけしに「二十三ヶ條の難詰狀は彼に致された。これは熱田に於ての出来事である。或る書狀には「熱田にては人数を備はし我等を打果さんとし、清須にては其趣に候」とある。其當時の狀態の如何に惨憺の氣に満ちて居たか知られるではないか。

△問答の形式

二三の記録に依つて考へるに、この二十三ヶ條は單に問詰狀と云ふわけではなく、浄土宗からの法論の仕かけに應じられたもので(双方とも勢上法論をせねばならぬ事になつて)上人は法論法度と云ふに對して少々遠慮して居られたのであつたが(内心は勇氣勃々であつても)此處に至つては未代までも應鑑となる法式に於て整々堂々と對論してみたい、否大御所家康の前で念佛門徒を一擧に取りひしむ家康をも感化してみたい、然れば日蓮上人の御深意の一分も立つ、こんな様にもお考へになつたのである。其二十三ヶ條に添へて別に奉行所に差出した箇條書は其一面を證明して居る。

問答格式

- 一 從書、天竺、大唐、我朝、三國共に宗論格式の事
- 一 御檢使の事
- 一 廣く諸經論を辨へたる經緯の事
- 一 判者人間答に四種の格式、八種の格式、十二

不惜身命の行者日經上人

種の格式辨へたる人たるべし
一 記録者は從兩方罷出す事、但文字ある才智の人なり
一 私語人作不可用事
前々より法門に詰り以て存人まぎれ詰を申すは(之まで幾度か念佛徒が法門に詰つて其場限りのゴマカシを云つた事を指す)皆宗論の法度に背き申候、天下の一統の御世に候間此度の問答未代まで高麗南蠻までも廣まり申すべき記録たるべく候間、三國法度のごとくに被仰付可被下候、
慶長十三年戊申十月三日
常樂院 日經判

△二十三箇條と浄土

僧の訴訟

そして其の二十三箇條と云ふのはどんなものか
一 妄語墮獄
二 背主八逆罪
三 依罪還俗
四 非理惡口墮在奈落
五 十四誹謗墮在無間
六 世尊法違逆墮獄
七 三部經無得
八 法華總文違背墮獄

- 九 依經對得悟違背
- 十 雜捨建立法華違背
- 十一 法華隨他暫開定散
- 十二 隨自後閉法然墮獄
- 十三 正直捨權捨捨合文
- 十四 唱題勸化文證必然
- 十五 題名受持得道證誠
- 十六 觀經法華前後迷謬
- 十七 科段破失天台遺背
- 十八 釋迦遺背佛敎墮落
- 十九 漸頓分經餘經無得
- 二十 涅槃得道法華餘殘
- 二十一 涅榮得道法華餘殘
- 二十二 身主說機次第問味
- 二十三 法然傍法入自記 (以上)

も、是を見て窮し、幾人寄つても百練千磨の日經上人の鏡録を受けられやうぞ、念佛徒の親分株も(一書には正覺)裏道から裏に脱出したのである「長老は法文の返事かなはずして、裏路を走り、清洲へにけ」それから念佛徒は回章をした、五六個國の學問のありさうな僧侶五百六十人ばかりも集つて數日間談合評議して見たが、宗旨の實力の相違は奈何とも方法がない。誰か法華の日經を閉口させる者はないかと焦慮してみたが、六百に近い坊さんの中に一人として我之れを碎かんと云ふものもない。かくなつて見ると例の念佛一流の陰險主義コソ泥式な手段

をやるより外に方法が無い。片押の謀反をたくみ、駿河へ被官申候事。日經と云ふ日蓮法華の門流の坊主が濫りに法論口争を表にして世を騒がせ候。幕府に怨みを持つなどの事も附け加へて駿府の家康へ訴へ出たのである。

△家康の苦策

大御所家康は大に怒つた、天下統一統漸く思徳に感謝しつゝある中であつて、法華坊主の徳川に怨を容むとは不埒千萬と、早速上人を呼び出したが怨恨としての證據は何もある筈はない、頃日法華の僧常樂、院日經なるもの、専ら邪法を弘め、念佛者は阿鼻墮獄信者は糞虫に劣ると著りに時俗を迷はして吾宗を塞ぐと云ふ一方の訴駁に依つて、家康をも糞虫に比したのには怪しからぬと「すでにのちを果たされんとせしが」此僧斬り捨てよと口には出たが、マテマテと思案が變つた、思慮にかけては狸爺の家康「此ま、斬つては名目が立たぬ、ヨシ誰かに申しつけ一問答させて日經を打敗かし、之を名押しして日蓮法華の鼻柱をくちいてくれんぞ」とは咄嗟の思ひ付「何とや思欲らん、十月七日八日に問答させんと被出候事、申もおろかの御礼明にて候」早速相手の浄土僧を探したが、「さて僧様の者ども、常樂院には問答にかたれまじ」と云ふではないか、之は案外、相手が無くては仕方がない。日經とは左程の豪き僧なると、憎さ氣は更に増すばかりであつた。狸爺たるもの何か味ある考へを出さずには居られぬ筈である。果然、四日の日の事、駿河では止めの事、江戸で秀忠と共に聴かうと云ひ出した。御所十月四日の仰出に、俄に御意の通は、爰元にて問答は聞きまじき間、江戸へ下り問答せよ、將軍と同心にきくべしと御意候事。あはれ日經上人は彼の爺の陰險手段の儘に身を投ぜねばならぬ破目に陥るの致し方ない事になつたのである。

△卑劣なる迫害

江戸の舞臺となつた、日經上人は家康の命に任せて江戸にくだつた(蟹町に宿泊して居られた)その時一記録に依ると上人は「法論は日經が勝つが家康の宗旨浄土宗と争ふのだから生かす命は奪られる」との意味が一信徒に與へた書状に記されて居る。上人の身上の危険は豫定の事であつた。いよ／＼十一月十五日對論すべしと上使が来た、それに就て對論の格に就て、せめて安土問答だけにでもしてもらいたいと願つたのだが、之は一言に斥けられた。「法論の式も何もいらす、大御所のお召し、將軍の御前に浄土宗の僧と問答を致させ、汝が日頃の願望を果さするばかりなり」と役人の聲は荒らかであつた。「何をくどくどと云ふぞ、法の問答の前に棒の振舞致しやらん」と云ふぞ、法の問答の前に棒さては表の方に機を待ち居りたし者どもドツとばかりに日經上人の居間に闖入した「奉行衆

六七十人どつとみだれ入、それがしを(日經を)さん／＼に踏み打撃して、足をふみくぢき、腰骨をうちぬき、頭をつく棒にてつきみしき、目鼻耳口より血を流し、一時(今の二時間)あまり死に入候。之れは餘りの亂暴非道のやうではあるが、幕府の方では豫定の事であつたのだ。正當に日經の正面に立つ相手はない、理に勝てぬ事が始めから解つて居るのだから、前日に半死半生にしてをいて氣の劣へたところを打ち込ませやうとした、それが少し薬が利すたのである。此事は家康の口から命ぜられたか、其の腹を推し量つて役人がやつたことか、増上寺の僧どもが役人と結託してやつたか、何れにしても法華の勝を念佛の勝にさせたい執心が專制政治の毒牙に現れた暴手段である、斬捨御免に理屈を有せて居た武力政治の下に、まして大御所家康の悪しみのかゝつて居た日經の腰骨を折る位のことには風前の塵である。經師の右の腕は折れ、後年筆執らるべき左の手も振ひを帯びて壯年の勇健なる筆蹟にも似ず其消息も幼きもの、書きたる様になりしは此時の迫害の痛みに因るのである。

た「五人の弟子ども、紙にて水をくれ、聲をあげて泣きたち候間、其時彼の狼藉人ども、打擲の所を退き申候、是は法華經の杖木瓦石而打擲之と申候、文にたがはず、不經菩薩の立行にあたり申候事、酷薄悲惨の状見る者をして思はず感憤せしめるではないか、この中にある之れ經文の符契、行者が當然受くべきものとして欣悦の心に住しらるゝ、經師の犠牲的の勇猛心は情夫も奮起せしめる力がある(是れ實に十一月十四日の夜の事である)

△江戸城内の強盜法難

明れば十五日の朝、未だ經師の氣心さへ朦朧たる枕邊に上使なるものは来た。スグに出頭せよと云ふ、弟子から様々に事情を訴へたが、聽かれぬ、結局上様の召されたり違背あるまじきものとして「其時血ぐるみになりたる身を、戸板にあをのけに引のせ、新城の廣間へかきすへられたのである。此以前家康の手前には役人から日經は昨夜より病氣なりと披露されてある、此の病氣にも不意な附加があつて、怪しからぬ日經の振舞なり病氣なれば戸板に乗せて召連れ來れとの事で此始末だとも記録されて居るものもある、此間に表裏の細工はあつたであらう。

殿に這入つた。あとに相手の一僧はつか／＼と戸板のところによつて來た「いかに日經、日頃汝大言壯語を吐きちらすも恐れ多くも上様の御前にては隠したるか」と二箇條の詰問を起したるに、元より半死半生の日經上人の答へられさうの筈がない。師匠の代りとして弟子の一人が答へたりともある。何れにしても當の相手の「日經返答なし、是れ法門閉口なり」として法衣を剥いだ。其状況を「死ねる者に妄語を申か如く無性なる日經が枕下に浄土宗の坊主に二ヶ條の法門を云はしむ、元より死人の如く息僅に通ふばかりなれば一言の返答もせず、御上意なりとて衣を剥ぐ、誠に日本無双の大強盜

機微譚語

山根青村

九六 粹菴の講書

長澤順平號は粹菴、仁齊の高弟にして戸田山城守忠真に仕ふ。有徳公曾て講を賜ひ且つ其講書を望ませらる、順平乃ち論語千乘之國の一章を講す、講經三日毎日たゞ同章を反復推演するのみ、公因て其章の意味粗悉したれば次章を講せよとありしに、順平曰く、此章を解し給はば天下は治むるに足らん、次章は講するに及ばずと言ひて辭し退く。(逸話文庫)

なり」と記録して居る、いかに半死半生の日に法門を仕かけ法門に負けたりとして衣を剥ぐ正しく強盜の所爲、上人の憤慨さこそと云ふべしである。

然り書悉く信すれば書なきに如かず、徒らに多讀の人得てして適從する所なく、所謂論語に多讀の論語知らずしての弊あり、寧ろ一章一節に集中して之を味讀し色讀するに如かざるなり、論語千乘章治者としての修養訓問然する所なく、一章よく之を實にすれば、雖て天下は平らかならん。佛敎經典五十卷、よし幾歳月を費して之を讀了せんも、其要を把握し適歸する所を知らずんば、徒らに薄學者と云はれんのみ至竟無用の閑人なり。如來既に説き畢りて而も

之を掃蕩和合し一丸の良薬となし給へり、法華の毒薬品はなり、信佛の徒宜しく爛漫の百花に酔ふを止めて、直ちに取らば此良薬を服すべし病除愈些の疑あることなし。

聖語、一切經の中に此毒薬品まします。天に日月の國に大王の山河に珠の人に神のなからんが如し。毒薬品を知らざる諸宗の學者は毒の如し、不知恩の者なり。

九七 富有二等

貝原益軒その舊友風竹散人の言を誦して曰く凡そ富に三等あり、邸宅宏麗に資財充たるは家の富なり、四體康健に耳目聰明なるは身の富なり、旁く物理に通じ古今を識るは心の富なりと、蓋し是れ前人未發の言なり(文藝類苑)世に曰く「金が敵の世の中」金さへあれば且那樣」と、世の多くは此言に惑らかされて臨目も振らずシコタマ持たため、斯くて一廉の成金となりたる時は如何、第宅の壯は得たらんも、而し無理をした驢の四肢不健、徒らに醫藥に親しみ頹齡を仰つが落なり。斯くして一樂二樂至竟無意味に畢り、第三の最樂は遠しとも遠し矣。若しそれ最初より「此文を御覽あらんよりは心の財を積せ給へ」との聖日蓮の指導に聽從して、信仰本位の實生活を積みなば、三樂共に併せ獲ん、妙くとも身心の二樂は請合なり。聖語、藏の財よりは身の財すべし、身

の財よりは心の財第一なり、此文を御覽あらんよりは、心の財を積せ給ふべし。

九八 加藤清正

清正或夜間に在りて遽かに思ひ出せる事ありと見え、其臣庄林軍人を召せと小姓に申付けける清正元來則に長時を費すの辭ありければ、軍人が召に應じて來りける時猶ほ願より出でず、中より呼びて申されけるは、汝を呼びたるは餘の儀にあらず、汝の僕に出來助と云へるは心懸よき者なり、去る頃汝と共に某所に赴ける時彼も汝に隨行したるが、他の從者は脚絆着けたるに、彼は獨り露當せしのみか服の下に鎖衣を着け居たり、少時太平なれば人々武邊の用心緩み勝なるに、彼は小者に似合す斯る心懸ありとは感すべき事と思ひ、斯る者を褒美するこそ國士を有する者の本意なれと思ひたり、然るに其後事に紛れて忘れ居たるに、今夕願に入り不圖之を思出し、さてこそ汝を呼びたるなれ、人の命數は果敢なき者なれば、今余か又は汝か出來助か三人の内、一人死しなば我心も空しくならんと思ひ、即時に此事を汝に語りて彼を受立て得せんと、夜中ながらも汝を呼びたるなりと申されたるにぞ、軍人は清正の恩を謝して出來助を賞せりと云ふ。(名將言行録)

せる智の清正に至りては、世既に定評あり、更に日蓮主義によりて鍛へ上げたる眞勇の清正に就ては、小湊護生寺に珍藏せる鐵兜銘之を評して餘りあり、曰く

世法即佛法、爲君父捨身、即釋迦多寶十方諸佛、必可護送、寂光寶刹也、勿恐勿退矣。

予着て金波樓主人中將の鐵兜銘を模寫せる扇面を享受し、今猶ほ愛重措かず、中將の謙嚴なる筆致と鬼將軍の堅實なる信仰の發露、兩々照し得て永く後昆に其範を垂るゝに足らん。智仁勇三德兼備の軍神加藤清正が、法華信者の典型として慶長元和の四條頼基として、四衆の典義的となりたるは事實なり。而もその清正公を本尊として信仰の客體となすものあるに至りては沙汰の限りなり、是れ併しながら法師の詠曲より起れる日蓮主義の証感なり、軍神清正を侮辱せる惡徳の大なるもの鼓を鳴らして之を呵責すべし、迷妄信者が之に對つて冥福を祈るは、其痴癡る憐むべきなり。

(十法界因果果鈔)

松尾鼓城氏に寄せてネオモニズムの見地より勞資關係を論ずるの書

伊藤 延次

左の如き梓附の前書で「大靈道」十月號に掲載されて居たから轉載する(一記者)

◎松尾鼓城法兄は、大價正木多日生氏の高足の俗弟子なり。嘗て其主宰する「みたから」誌上に於て「勞働者は勞働を資本とする外に、多數の一結したる資金の勢力を併せ占めざるべからず」と力産論の提唱は、端なくも多數人士の感動を惹き、這回共同貯金の旗幟の下に力産會の實現を見る。會員は一口以上の合資金を納入し(二十圓、毎月一圓づつ十二箇月に納む)之を確實有利に活用し究竟資本化せしむるを以て目的とす。松尾法兄の之に對して傾倒せる熱誠の異常なるものあれば、異日其大成を見るべきは期して疑はず。是我が甚深の共鳴を感じ衷心の愉快禁ずる能はざる所、即ち之を草す。

松尾鼓城法兄。

私の有する見解、それは猶少しく發表の形式を研究してからと思つたので、未だ兄に話す機会を得ませんでした。今、兄の力産運動の報道を受取つて衷心からの愉快に堪えず、爰に私の所見を寄せて回答の辭に代ふることに致しませう。

ネオモニズム

從來心的に、物的に、或は超自然的に一元論の提唱はありました。蓋しそれは萬有の本源は一元より出發し、我等の眞實相は一元の上に置かれてあると稱するものでありまして、一元を我等の過去の發足點に回顧し

松尾鼓城氏に寄せてネオモニズムの見地より勞資關係を論ずるの書

て之が愉快を以て能事とするのみであります。設し夫れ人が私の所説を管めて、過去といふ時間的制限を有する言葉を使ふとが悪いといふならば私は一元を故郷とする思想と言ひ改めませう。然して私の主張は過去の故郷は何ともあれ、光輝ある希望を未來に繋いで一元の植民地を發見しようとするのが私の新一元論であります。過去を回顧するモニズムに對して、未來を憧憬するネオモニズムと稱します。従て私のネオモニズムは之を論ずることに依りて意見が成立するのでなく、之を行ふことに依りて建設せられ、我等の生活に具現されることに於て始めて其歸結を得るのであります。

単一生活

此ネオモニズムを我等の生活に具現する方式を、私は単一生活と稱したのであります。敢て単一生活といひませぬ。單純生活でもありませぬ、純一生活でもありませぬ、勿論簡易生活でもありませぬ、此意義を現すには英語の方が明快であると思ひます。(簡易生活のシムアル・ライフでなく) シングル・ライフを以て表示したのであります。勿論シングル・ライフはパチエラアの意味に慣用されて居ることは滿ざら知らぬでもありませぬが人類を複雑難究なる物鎖より解放して、自己本具の基本生活に還らしめんとする私の主張を發表するのに、彼をダブル・ライフと言ふとすれば、是をシングル・ライフと唱ふることは最も處を得て居ると信じたるが爲めであります。

生活の過重負擔

現在の生活状態を觀ますに、社會の上にも、國家の上にも、乃至個人の上にも、所在二重生活の煩に堪えず、今や其輻の下に困頓しつゝあります。社會の上には、國家の上には、個人の上には、外界より内部よりヒシ／＼と推寄せて來る苦惱は抑も何に胚胎されたものでせう。いふまでもなく二重生活の負擔に餘儀なくされたのであります。

私が稱する単一生活は、現在に於ては此二重生活から脱出しようとする陣痛の呻吟で、未來に於ては我等が依りて到達すべき最後の實處であります。現在の生活は、虚偽の皮殻を以て二重にも、三重にも裏んであるが爲めに、眞實の核心は遂に其芽を生ずるに至りませぬ。此虚偽の皮殻を以て裏まれたる生活を二重生活といひ、眞實の核心を曳し出さうとする努力の生活を

單一生活といふのであります。自然は、間断なく單一生活の啓示を我等に與へつゝあります。其手に照管せられ、其懐に煦育されたる我等は、毫も其啓示の單一を以て生活の基礎とはせず、二重に、三重に、十重に、二十重の生活を營みつゝ、之を是れ文明なりと認めて居ります。道徳的にいへば、我等の生活全般は虚偽冒濫を以て掩はれて居ります。されば我等が單一生活に赴くには、先づ自己の虚偽の輝光にスタートを切らなければなりません。が、我等は全然虚偽より離れて社會生活を營むことは可能でせうか。それは殆んど絶望に近いこととあります。従て我等は内面的に我等の虚偽なる個人生活を改造すると共に、更らに國家生活上の、社會生活上の虚偽の掃蕩に努力しなければなりません。個人にあり、國家にあり、社會にあり、其二重三重の生活を營むといふことは、非常なる能率の消耗と共に良心の缺陷を暴露したものであります。

單一生活の眞義

私が單一生活といふのは、家庭や服装や其他の文物に複雑なる設備をするのを非なりとするやうな、そんな皮相的のものではありません。社會、國家、個人の上に覆ひ蓋される一切の虚偽の黒雲を打破掃蕩すればやがてそこに單一生活の光輝は全現するのであります。

社會は多数の女人と多数の男子とによりて組織されてあります。假りに其性の相異を單一化し得て、社會を男性のみ、或は女性のみ、又は中性のみにしたなら人類は果して幸福でせうか。柳は綠、花は紅の色相をを擔保として第二の事業を企畫し、此くの如くにして第三第四と資産を累積するのであります。更らに彼等は割引だの借越だのといふ便宜を享けて無限に資本運用の途が備へられて居ります。是等は畢竟非資本家が積立てた資金を、所謂資本家に利用されてそれで居て傲然資本家風を吹かされて黙つて居るのであります。従つて所謂資本家なるものゝ假面を剥いて、其實體關係をアラス、マイナスして見れば、意外にもそれが無資本家であることが發見されるでせう。

勿論、今所謂資本家なるものを目して無資産者とは申しませぬ。彼等が動産不動産を有つて居ることは事實であります。然して其動産不動産をして價を生ぜしめたのは労働の賜ものであるといふことは姑く申しますまい。唯一つ動かし難い事實、即ち彼等資本家は資金なるものを其資産以上に運用して居るは事實です。其資金を大なり小なり銀行に仰いで居るといふことに想到しますれば、其は非資本家の懐金が大部分を占めて居るといふに躊躇しないでせう。

非資本家の覺醒

故に若し非資本家が覺醒奮起して、一齊に其貯金預金の回收を始めたとしたら怎麼でせう。由々しき經濟界の大動亂を起すべしとは想像するだも戦慄に堪へませぬ。然るに資本家が、労働の同盟罷工に頭腦を悩まして居られるといふのは、寧ろ天下太平の現象です。是等非資本家の奮起もなく、貯金預金の回收をも見ないといふのは、要するに非資本家が事業經營に對して堅固を有つに至らなかつた故であります。幸に適當なる指導者を得て預託金運用の途が開けたならば、立

日蓮主義者の奮起せる勞資問題の解決方法としての會合

混濁して、それを唯だ一色に塗替へたなら、地上はさぞ殺風景なものになるでせう。私の意見は自然の實相を破壊してまでネオモニズムの領域を擴張しようとするほど主我的ではありません。柳は綠、花は紅であつてこそそこに單一生活が発見し得られるのであります。綠なるべき柳や、紅なるべき花の自然相を矯飾して單一的の相を營ばしむるといふことは、寧ろ單一生活を裏切るものであります。

勞資問題

私に、今手に單一生活の鍵を握つて社會、國家乃至個人の問題に臨みますと何れも都合よく其扉を開いて呉れるのに感謝致します。然して其鍵に依りて開かれたる各個の問題は、孰れも今よりは一層より善き状態に進むといふ自信が意識されます。

そこで私は今、兄が提唱せらるゝ力産問題に就て考へて見なければなりません。私としては長い宿題でありまして、之を私の用言で申しますれば、労働と資本、此二者が力産の名の下に單一化されたと言へば言ひ得るのでせう。然して又労働者は合同して資本を結集せよといふのも此上もない時宜に適した御主張であります。

今や世を擧げて資本對労働の協同問題が高唱されます。資本と労働、それが其根柢に於て別異のものであつたなら、勿論協同が必要でせう。兄の努力が酬みられて——無論酬みられませぬ——労働者が資本を擁することとなつた時、労働者は事業經營に對して理會を有つこととなりませう。資本家も労働の重んずべきことを身に浸みて思ひ知るでせう。茲に至れば労働と資本

歸結

どこかに数十倍のシンジケートは成立する譯であります。

日蓮主義者の奮起せる勞資問題の解決方法としての會合

▲小石川砲兵工廠へ勤務せる日蓮主義者の人々で組織せる身讀會と云ふのがあつた、其れには本誌の松尾氏が指導者であつた。
▲一方には本多親下が發起せられた自慶會と云ふ勞資問題に應じた會が組織されて「みたら」といふ雑誌が發行されてあり、之に松尾氏が力産論といふのを掲げた事が由來して、彼の身讀會の人々を中心になつて力産會といふのが組織された。マア云はゞ身讀會と自慶會とが或る因縁に依つて力産會を生んだとも云へる。
▲八月二日以来數回の會合が催されて、會は設立された。皇室中心主義、信仰主義、資本家も労働者もない、資本家もトボケれば貧乏する、

の問題は勞せずして解決せらるゝでせう。去年、此形式は労働者が資本家を兼ね、兩者の間に理解が生ずるといふ程度に止りはせまいか。是が動かすべからざる鐵則であつたと致しますれば、私のネオモニズムの鏡を振ふことは、勞資問題に對しては蓋控へなければなりません。何となれば協同は相の上の名で、單一化は體に名づけたものであるが故であります。

勞資の單一化

兄よ。資本は労働の集積なりとは長らくの間繰返された標語でありませぬか。此二者が不正當にも分離の形式を執て居るのは現在の世相ではありませぬか。私は今それを原始時代に還元して其合一を見るに至らしめなければなりません。言明か矯激に涉りまするが、私の觀る所を以てしますれば世に一人の資本家なるものを發見しませぬ。彼等は一種の輕業と手品とを心得て居て、巧みに資本家を被り通す興行師に外ならぬのであります。

資本の所有者

我國の郵便貯金は四億を算して居ります。然して銀行貯金は四十億といふではありませぬか。是等の資金は何によりて造り上げられたのでせう。却て是労働の所産であります。従つて労働者の所有であるといふことが言ひ得られます。倘しさういふことが不穩當なれば、非資本家の有であると申しませう。米食者が米の生産者ならざるが如く、資本家即ち資本消化者は資本生産者ではありませぬ。然も彼等は一種の手品に依りてそれを擅用し、それを資本化し、株式に代へ、それ

論旨甚だ散漫に過ぎましたので、茲に改めて之を收束して置きます。資本は非資本家の大部分を占むる労働者の有であります。自覺ある労働者は之を回收して資本化しなければなりません。是に至りて始めて眞個勞資の單一化を見る譯であります。

此宣言、敢て讀みて松尾法兄の清譽を仰ぎます。(大正八、八、七)

▲發起人の選舉の結果理事も會長も會計係規程も出來た。

も評議員も出た。統一閣の幹事連中の應援もある。資金の保管者も依頼承諾される。

理事

- 岩井庄三郎 東端 兼吉 猪又金太郎
 - 松尾 清明 内田四市郎 富岡才次郎
 - 馬場 熊吉 野島 連平 高橋 辰二
 - 高山 逸明 平川 正義 藤本 芳徳
- (松尾は會長に選舉され理事辭退、理事は十名の所十二名に改正、一名欠)

會長

松尾 清明

評議員

- 伊藤 徳松 宮澤 種吉 伊藤 延二
- 内倉 治吉 建部岩一郎 前田警太郎
- 窪田 貞二 黒須源太郎 玉川由太郎
- 佐藤代五郎 友廣 善夫 山崎忠次郎
- 岡島松次郎 野元 盛幹 吉岡正太郎
- 小和田鐵太郎

資金保管者

- 矢野 茂 安川 繁種 (擔當者)
- 猪又金太郎(主任) 安藤林平(補助)

會計係

- 高田保太郎 武田金次郎 猪又 幸藏
- 宮澤 光平 内藤慶次郎 石川 秋重
- 小宮 金藏 中島 良介 花井時次郎
- 渡邊 侃 信田幸太郎 田川金太郎
- 久世卯三郎 兼田 純司 幅 政吉
- 黒須源太郎

委員

- 統一閣の幹事、加藤、田村、山本、後藤、若林、内海、山田、川島、大原、竹下、龜井、山田、小島、吉田氏等三十餘名を賛助員に推薦する。

十月十七日神嘗祭の好日を以て發會式を擧げる、發起人は前日から其役々に就て奔走する紅白の襷褌を張り、大國旗を掲げ、それらの準備整ふ、定刻午後一時より開會

發會式順序

- 開會の辭 理事 猪又 金太郎
- 經過報告及力産會の精神 會長 松尾 清明
- 皮申證書拜讀 海軍中將 宮岡直記閣下
- 講話 大僧正 本多日生現下
- 祝文 自慶會理事長 矢野 茂閣下
- 同 祝文 自慶會理事長 宮原 六郎君
- 祝文 小石川砲兵工廠内會員總代 伊藤 徳松君
- 同 祝文 身置會員總代 井庄三郎君
- 同 祝文 宮岡直記閣下
- 所感講話 六郎閣下、外數名
- 謝辭 會員總代 宮澤 種吉
- 兩陛下 萬歳一同唱和 音頭 矢野 茂閣下
- 餘興 講話 會員 清瀬 蝶花

それより二階廣間にて懇親會を開く、集まるもの八十餘名、各人の所感席上談話ありて、松尾氏會員を代表して謝辭を述べ終りて高山氏の音頭にて、兩陛下の萬歳を三唱し、窪田氏の音頭にて力産會の萬歳を高唱し、各人勇氣漲々の中に大喜悅の情あふれて無事散會をした。

- 一金貳拾圓 島 連太郎殿
- 一金壹圓 野島 連平殿
- 一金壹圓 安藤 林平殿
- 一金壹圓 宮澤 種吉殿
- 一金壹圓 高橋 辰二殿
- 一金壹圓 小島 貞二殿
- 一金貳圓 窪田 貞二殿
- 一金貳圓 日比野妙鏡殿
- 一金貳圓 獅子王文庫殿
- 一金貳圓 玉川由太郎殿
- 一金貳圓 建部岩一郎殿

▲十月十八日の萬朝報には「三代續く資本家は少い、労働者も心掛一つで資本家に成れる」の題目の下に左の記事が載つて居た。

労働資本の徹底的解決を求むるの目的で、松尾清明猪又金太郎其他の諸氏は「力産會」を組織し、十七日午後淺草清島町の統一閣で其發會式を擧げた、後援者たる

本多日生師の講演に曰く、労働問題は國家の立場の上に労働者の幸福といふことに目覚めねばならぬ、この意味に於て資本家の存在も必要である、併し天下は廻り持ちで金持はそれ程羨むべきものでない、お寺の過去帳で見ても三代と續いてゐる資本家は少い、労働者も心掛によつて資本家となることが出来る、金持ちであらうが労働者であらうが、要は人格の修養が必要である

社會的に生産に力むる人即ち力産者を會員とし會では會員から毎月一圓宛の會費を徴收し、之を資本に運用して其利益を會員に分配し、以て徹底的に労働問題を解決する筈で、目下假事務所を小石川白山前町一七に置き、引き続き會員の募集中である。

統一閣報

本多本團總裁の近狀

本多本團總裁現下は統一閣毎日曜例會の講演、十六日の婦人會、晴明會(數回)、講妙會(數回)、自慶會(數回)、力産會、内務省編託各地講演、其他教育又は宗門の講演等毎月二十回以上、時には一日數回の講演あり、此の外に會長としての事務總覽あり著述あり、殆ど寧日なきの有様にて男健奮闘眞に人間業にあらざるの働には何れも否を卷けり、斯の如き人を得たる眞に我精神界の幸福と云ふべし。

統一閣

統一閣は、例の如く毎月日曜定期講演あり、此外日曜朝は少年少女の會あり。青年會、講妙會、婦人會、毎月一日は自慶會の労働者慰安會あり。▲十一月九日は幹事會ありたり。



課題和歌「暮村」

子爵 清岡長言選

- 天 丹波國加佐郡有路上村 廣岡圓
- 夕からすねくらにかへるこゑのしほ
- くるゝも早し山かけの村
- 地 神田區表神保町 福田參四郎
- 麓路に蕪葉くけふり打なびき
- 暮れゆく村はさびしかりけり
- 人 福岡市外箱崎 熊澤 優子
- くれ竹の伏見の里の夕まくれ
- 殿くらをいそぐ村雀かな
- 入選 順序不同
- つき出す麓の寺の鐘湧えて煙たなひく里の夕暮
- 千葉縣 吉井 たい
- たちならぶ谷間の小家のかげうすく高嶺に残る
- 夕づく日哉 千葉縣 中村 綱
- かへりくるわがあしもとにむしなきて山むらさき
- きにくるゝむらさきと 大久保 大久保孝子
- 夕鴉ねくらにいそぐ聲のしほは静かに煙りら

- すらむ 高岡市 古谷孫右衛門
- 道をとふ人なき原にたゝひとりとくるゝをしむ
- 遠の村里 澁谷 立川 金峯
- 二つ三つ流火みえて程もなく岸邊に淡き志賀の
- 里哉 大阪市 長尾宿之助
- 晩がたく夕鐘の煙り打なびきくるゝも早き山の
- 下村 千葉縣 福島 正之
- 暮て行く田中の村に電の燈火光る君が御代かな
- 同 萬新會一止
- たかすめる村にやあるらんくれかゝるそらにゆ
- かしき琴の音そする 三河島 西澤 明花
- 秋の香を尋ねめぐりて西山のふもとの里に日を
- くらしけり 京都 中野 正甫
- 遠近の紅葉かりしてかへるこの村里とほく火か
- けみゆなり 下 總 柳橋八重子
- ほしねれる山田の里に日ははくれてかたへさむし
- き秋の夕ぐれ 同 春日よし子
- 山寺のかねのひびきに日は暮てかたへさびしき
- 遠の村里 同 江波月あき子
- うふすなの森のこなたに日はをちてねぐらにい
- そぐ村からすかな 同 林 五し子
- 柿の實の紅きを籠むる夕霧に麓の村のやゝに暮
- れゆく 牛 込 永橋 晚江
- 夕けたくかまどの煙たなびきて豊にくるゝ遠の
- むら里 雜司ヶ谷 矢野 浪子
- しづの女が唄ふあたりの人影もほのかにかみへて
- 暮るゝ里かな 出 雲 石橋 芳夫
- 谷川の音もあはれはれにきこゆなりくれ行く村の家
- もくるみて 白山 松尾 周子

於て清光婦人會主催の宗廟御會式舉行「成佛の悦を現
在に味ふ」金光師。十八日木山に於て聖祖門下同志會
秋季大會「開會の辭」松井行英師、「現代思想と日蓮主
義」昆尼薩合師、「地獄極楽を論ず」久世寬照師、「勞
働問題の解決」萩原部長。十九日正行婦人會、萩原僧
正出演。▲廿七日夜妙満寺に於て、
△日蓮主義大講演會開催 聴衆満堂、「開會の辭」金
光布教師、「犧牲的精神と日蓮主義」大野少佐、「自己
改造より世界改造へ」文學士武田國龍師、「國民教化
と日蓮主義」本多管長現下。▲十月廿八日夜七時より
明倫小學校に於て、
△同志會主催の大講演會 を開く、「開會の辭」明倫
校長、「國民教化の根本的考察」本多管長現下、聴衆満
堂盛會なりき。因に此館には西村一家大に勢力され
り。▲廿七日午後一時龜岡郡公會堂に於て、
△民力涵養大講演會 を開く、「開會の辭」郡長松
永立五君、「國民教化の大木(其一)本多管長現下。▲廿
八日午後一時より、
△南桑田郡馬路村宗林寺 に於て民力涵養の大講演
會を開く、「開會の辭」郡長松永立五君、「國民教化の
大木(其二)本多管長現下、爾同共聴衆満堂にて頗る
盛會なりき。因に有田宏道、金光孝碩二師隨行されし
が、郡長松永立五氏は公務多忙にも不拘講演の準備講
師送迎等に幹旋せられたり。▲廿八日午後二時木山に
於て開山會(靈巖)に就て「有田宏道師。
▲日經上人大法會 十一月十五、十六日度修、其報
導は次號。

名古屋 (八、九、十月分)

○八月七日夜
釋尊の本懐 妙行寺 草切 信榮
生活と修養 清水 一 乘
時局と日蓮主義 國友 日 斌
常徳寺
同日八日夜

國民思想と日蓮主義 草切 信榮
顯本の主張 清水 一 乘
現代思潮に就て 國友 日 斌
同月十日夜
立正安國主義 靈山寺
三大 誓願 草切 信榮
同月十七日晝 孟蘭盆 常徳寺 清水 一 乘
孟蘭盆と施餓鬼の意義 妙行寺 清水 一 乘
同月十八日晝 本宗の教義 清水 一 乘
同月廿日晝 顯本法の主張 靈山寺 清水 一 乘
同月廿四日晝 法華安心の心得 法通寺 清水 一 乘
同月廿七日夜 實生活の正義 妙行寺 草切 信榮
日什正師の特長 常徳寺 清水 一 乘
同月八日夜 人生 常徳寺 草切 信榮
宗教の撰擇 靈山寺 清水 一 乘
同月十日夜 東西文明と日蓮主義 草切 信榮
寂日房御書 清水 一 乘
同月十九日 到彼岸と日蓮主義 彼岸會 靈山寺 清水 一 乘
同月廿四日晝 如 渡 得 船 彼岸會 常徳寺 清水 一 乘
○八月八日夜 中華聯合布教 常徳寺 清水 一 乘
法華經と日本國 萩原 日 道
世界統一の宗教 聯合布教會 清水 一 乘
同月九日夜 伊勢四日市布教所 聯合布教會 萩原 日 道
國民自覺の時 萩原 日 道
一大事因縁 聯合布教會 靈山寺 清水 一 乘
同月十日夜 聯合布教會 靈山寺 清水 一 乘
日蓮上人降誕と日本

月次句集

○天位
千葉縣中島 水永寺にて
石橋 小星
梅澤 莊夢
松尾かね女
立川 金峰
有田 麗瀧
山根 青村
西澤 明花
松尾 鼓城
市外 明花
淺卓 青村
淺谷 金峰
白山かね女
上總 莊夢
出雲 小星
高岡 雲峰
岡本 露谷
酒々井秋月
堺 滿月
丹後 百穂
淺草 慶山
牛込 晚江
上總 蓮水
大阪 直水
鼓城

現代思潮と日蓮主義 萩原 日 道
同月廿四日前十時 豐田機械會社支配人及事務員の
爲に
勞働問題に就て 本多日生現下
同日午後二時職工女一般千五百人の爲に
人の光り 本多日生現下

東 参

愛知縣下愛州野田法華寺は、本月十一、
二兩日間に亘り顯本教會を執行せり。修
法之導師西山日輪師、隨喜參列者高橋、野中、増田、
豐田師等の援助の下に盛大に嚴修せらる。法要後晝夜
共に各師交互演説せられ法益甚大なり。管事高橋師は
人格的釋迦牟尼世尊の演説にて講演せられたり。
同國田原當行寺にても同十三日顯本教會修行す。修
法後講演に移り、高橋師其外各師士出演せられ、晝は
説教、夜は演説。當日は大雨の爲參詣者少なく午後
快晴を待ちて執行せしかば意外に盛會なりき。
遠 州 三十日見付四恩會、遠江日蓮演習會主催
となり、午後二時より煙草專賣局にて小
泉中將、本多大僧正の講演あり。午後七時より、
△見付野田座にて國民思想大講演開催、聴衆一千
二百、矢野郡長の開會の辭、小泉中將、本多大僧正の
講演ありて高田氏閉會を宣す。▲三十一日午前十時よ
り見付縣立農學校にて同校學生の爲、本多大僧正の講
演あり、午後二時より、
△中泉町公會堂 に國民思想大講演開催、聴衆千三
百、伊藤在郷軍人會長の開會の辭、小泉中將、本多大
僧正の講演あり、爾日とも大盛況、蓋し山本師平素の
奮闘と一面には是に輝きより改宗し今春日蓮演習會を組
織し、爾來熱烈なる運動を試みつるの跡水三郎平氏
並に友妙寺總代、勾坂、磯部、杉浦、伊藤の諸氏及檀
信徒の努力に映つもの多し。

静 岡

十月三十一日夜静岡明會主催の下に、
同市師範校講堂に民力涵養講演會開催、
生憎の雨天なりしも聴衆約三百。同市は各宗共教界頗
ふる振はず、新莊氏獨り立つて晴明會を組織し組織甚

其別報

國民思想大講演會

遠州横須賀町なる日蓮主義の青年、石川一郎氏の發
起にて、去る十月廿九日同地公會堂にて右大會を催す
日蓮主義の信仰 新莊晴明會主幹
兵備擴張の急務 小泉海軍中將閣下
民力涵養の急務 本多大僧正現下
聴衆約七百、頗る盛なりき。

然るに右本多現下の基督教折伏講演に
對て同地教會にては一大事と感ぜしと見
へ、十一月七日夜島田三郎を看板に引出
し來りて對抗的講演會を試み、同地駐在
加家牧師登壇し「本多師の謬見を排す」と
題して説き出せし處、遂に人身攻撃的態
度に走り、更に世界的大思潮たる民本主
義に順應せざる日本國民は固陋なりと罵
るや、同志と共に席の一隅にありし石川
氏(二十一才の青年)は奮然立上りて「國
賊引込め」と怒號す、場内一時に之に和
して関の聲起り、爲めに彼牧師は立往生
をなす事十五分許り、遂に堪へずして逃
げ下りしといふ實に近來の痛快事といふ
べし。

野 田

遠三地方は本年は近年稀有の暴風にて、
被害甚大の割合に農作物の被害甚なかり
しかば、野田法華寺に於ては感傷的精神も含まれて、
十一、十二の兩日教會法要執行せられ、五六里の遠き
處より參詣集ひ來たりて頗る盛大なりし。十一日午後

塵塚に名なき草花のさかり哉
○地位
秋水の静なりけり草の色
○人位
汽車行けば月亦早し夜寒哉
○佳作
鴨立つや水田に残る星の影
こつそりと瀧間を流れて秋水
空晴れて耀く月の高きかな
立つては音せきりけり稻雀
すがる兒をよみて秋の夜なべ哉
重さげに稻にすがりけり稻雀
○入選
雨風も喜ぶらしき稻すゝめ
秋の夜や寝さめ心に日の音
秋の夜の仕事よりよき主哉
丹精や遠慮素知らぬ稻雀
秋の夜を講打つ音のそりかな
稻雀粟の隣りのもどかしき
秋の夜や所せまましき俵敷
手を打てど追へど來る稲雀
秋の夜や子供もまて仕事振
咄聴へるはかりなりけり稻雀
○極め
昇りけり皆の居直る月見の座
○追加
雲分けて笑顔見せけりお月様
▲課題
枯野。 鶴嶋
十一月五日繪切

一時法樂殿修。三時より説教、

信仰の調整 増田 智静師
種子 無上 高橋 道順師
午後八時開會講演 豊田 通泰師
欲望と満足 野中 通玄師
佛陀の真相 増田 智静師
時代の新聞向 増田 智静師
晝夜共参詣者満堂
△十二日午前十時午後一時法樂殿修。同二時より講演

知恩報恩 豊田 智静師
基本的礎 増田 智静師
人格實在の佛陀 高橋 道順師
等に於て兩日共参詣者満堂にて、此の地にも日蓮大偉人の説教的氣分の盛なるを見ず、又喜しき哉。

▲第二報 田原町當行寺教會。田原日本の偉人華山先生を産み、帝國の大忠臣兒島高徳を祭祀する所に候此の子孫此地に在りて代々田原の城主たりしと聞く、風雨篠を衝くの日となりしも當日は晴天となりぬ。
▲十三日午後二時法樂殿修。同日三時説教
佛教觀を徹底せよ 増田 智静師
佛陀の教護と入涅槃 高橋 道順師
▲午後八時講演
豊田、増田、高橋の諸師、順次講演されたり。

廣島 明石の川崎英照師は、過般廣島方面へ遠征し、法鼓を鳴らしたり、以下其報道をなさん。中にも縣下賀茂郡川上村にては、眞宗僧たる妙福寺住職栗田師盡力して法華僧たる同師を聘し民力満蒙の講演會を催したるは破天荒の事に屬す多大の感謝を受けたるも亦不思議なり。開會の辭を島田日開師「民力満蒙に就て」を川崎師講演す。▲十一日は、高田郡井原高源寺に於て午後一時より長美明師開會の辭にて、同師は日蓮主義の綱領を。夜に續きて二師の講演あり。翌十二日晝、同寺に川崎師の講演。夜も引續き行ふ。▲十三日は正木村にて晝夜とも講演。▲翌十

四日晝は廣島の木照寺にて島田師と共に講演。題は「先づ個人改造より」夜も開演す。翌日晝夜とも同じ。
▲十六日晝は松川町妙源寺にて「金剛定の山に登らん」の題。夜も開演。▲かくて廣島地方は一周間の講演を終る。吉田多治の郡部は農繁期なるを以て延期す。
堺市 十月廿一日堺市妙源寺に護正會の例會を開く、生活上より來る思想の危險化を京藤義應、佛敎の人生訓を川崎布教師。
明石 例月三回の研究會、二回の法華經講義會、檀香會、婦人會の例會の外に十月廿六日夜武田文學士を迎へて明石圓乘寺に臨時講演會を開く。個人改造より世界改造へ。文學士 武田圓龍。
金澤 十月廿二日日本長寺に於て信仰と得益を演説あり、木佛の實在を演説。新聞記者と日蓮主義を吉倉水央氏。毒鼓の勝縁を小島由之助氏。同廿八日日本多町本行寺にて法華經の妙能を石橋會章師。同廿九日中本多町本行寺にて、何れも眞面目なる弘教と其信徳によりて大に望みを將來に屬せらるると云ふ。
美作 十月十二日夜、日蓮主義津山青年會を弘通所に開く。開會の辭を井上義雄、青年會への希望を能仁一十。▲二と七の日は例月の如く能仁一十師の法話あり。
大阪 十月十八日夜空閑寺にて木化觀教團講演會の辭京藤義應、妙力を獲得せよ志津木貫誠、信仰石井貫一、各師の熱辯に依り聽衆に多大の感動を興へられたり。
伯耆 松崎に故朝會師の後を受けて本立寺の住職となれる富田林惠師は、しばらく沈靜の姿なりしが、斯くてあるべきにあらずとして過般より弘法運動を起せり。九月廿五日日本立寺に於て幻燈會を催す。宗教と道徳を富田林惠、人と法とを廣瀬信光廿五日同じく富田師の外に木本慧精師講演。十一月四日宗祖御法難會修法の後講演及び幻燈會、雜説論、富田師。

臨時増刊に就て

表紙二面の廣告にもおこと、はり申しました如く、印刷所の都合にて本誌の發刊延引には止むなく、松尾主任は信徒猪又金太郎、芹田、高山の諸氏主任の妻女、小供も之に参加して手摺の印刷(謄寫版)を三日間か、つて裏表其他の印刷を合して七千べんローラを廻しまして手首を痛くしました。そして其延刊の理由を御報告致しました。どうぞ右の努力に免じて延刊御海容下さい。その代り以來一日の發行日となりません。

統一發行所同人

四日市

十月九日夜、樋之町布教場にて講演、御心に開けを清水一乘、生る信仰日蓮主義を本山部長秋原日蓮の二師、九月は大祭禮にて休會。十月五日渡瀬新與寺に於て出海師導師にて吉岡松次郎氏の剃度式を舉行し、其家族親戚及び同寺檀信徒の爲め、中原布教師の「信仰の純潔」と題せる熱烈なる法話あり。▲六日日本泰寺にて同信會を開き「法華經の要義」を。▲同日大津田古賀敏松氏宅に於て家庭講話「信仰の正統」を共に中原師の進化(續講)中原法學士、人と教と國を中原布教師。▲十月十二日晝本泰寺に正信會を開く、講師中原師、題は「日蓮主義と敬神觀念」なり。▲同日晚同寺に日蓮主義講演會開演、小泉顯應、平岡本信、吉見法榮、中原顯應の四師出席、雨天にて却つて聽衆に深き注意と感動を興へたり。

久留米

▲山武統一團 例月十八日は山岡師修法の下に片岡氏宅に於て講演を開き、十月七日東金町合方妙福寺に於て例會を催し金坂乾受、成島日南、中村日錦三師の講演ありたり。猶成島師は常陸鹿島郡若松村須田區有志者の希望に依り、同所會合所に於て日蓮主義の宣傳を爲せり。而して會合者は皆眞實宗宗の人々なりき。

千葉縣

▲片貝通信 小關妙覺寺に於ては十月八日午後より修養講演會を催し餘興をも附加したり。爲に統一節千代木茂雄は由比ヶ濱日郎上人の別れ、次に生活と信仰を大橋日農師、人格養生の原動力を土屋眞容師、終りに龍の口夜半の太刀風を千代木演ず、右は九州東京日々新聞千葉縣版に掲載たり。▲十二日小關妙覺寺に於て大橋師の講演。十九日片貝大塚家に於ても同橋廿六日片貝小學校に於て民力満蒙講演會。自治と修養を大橋、相互の美風を土屋、二師何れも演説せらる。

宮谷本國寺

▲宮谷本國寺 十一月五日第六教區秋季布教及び朝日講演會を執行す、當日午前九時頃より各講中は

日宗法衣專門
青雲帽 系教服 袴

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七

定價表ハ御申越次第
何時までも御送申上候



日本橋區坂本公園附近
加賀 加能亭
料理 加能亭
酒は芳醇のキ一本にて肴は百萬石の旨味氣質



（號八十九百二第）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年一月一日發行（毎月一日發行）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年十二月一日發行（毎月一日發行）

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
●御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候
京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠 小野嘉助
電話 中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布 眼の薬 効能、たゞれ目、かすみ
田 目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
ーム等
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五十錢、
七拾錢、壹圓

布 血の薬 定價二包入拾五錢、十
田 五包入壹圓、効能、男
女ちの道、産前産後、めまい、たちくらみ、
時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人
病、貧血疾、風邪
千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布眼藥 本舖 齋藤 日章
田血の薬
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 一直に御聯想下
京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話 中七三五番
振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●初も神佛具を調製する敬虔心を以て奉仕候●

佛像佛具 調度所

宮殿幢天蓋 一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達

京都市寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事
大佛師 辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話 下三二五八番
●御用せ被下候は、町際深切を旨と致候●

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

●佛壇、佛具一切卸小賣



定價表 郵稅四錢

卸部 三法堂 藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
各宗御本山御用達
長距離電話中二七三番
電話 東二〇七三番
大阪 四三二九番
同區 小橋東入
小賣部 三法堂佛具陳列場

生徒募集

千葉縣千葉郡千葉町院内
（千葉神社裏通）
憲兵屯所向横丁
私立 山刺繡學校
校長 山口京太郎

規則書入用の方は御通知次第校則を
進呈いたします

新年巻頭の所感

今の一月一日は泰西人の私作にかゝる太陽曆に従つて生
ずる元旦也、太陽曆は太陰曆に比して勝ること萬々なり
と雖も、之を北斗曆の萬世不易の正曆に比して劣れり。
太陽曆は我國の習慣に對して春春たらず、秋秋たらず、
二月に二十八日の不具數を生ずるなど不滿の點多し。凡
そ曆は畢竟する所天地の自然に基かざる可らず。釋迦尊、
聖孔子、聖德太子、日蓮聖人等皆孰れも實に北斗曆に依
り給ひしもの也。北斗曆に依るときは、大正九年は太陽曆
二月七日陰曆十二月十八日に當る。我等は東洋文明の權
威を示し、併せて天地の眞理に浴すべく我國の公曆の一
日も早く北斗曆に改正され、眞の正月元旦の用ひられ、
聖祖の良の義の顯れんことを祈ることや深し。聊か所感
を記す。（太陽曆九年一月一日は陰曆十一月十一日）
（北斗曆十一月廿五日に當る、冬季なり）
（松尾生）